

突堤

宮本百合子

青空文庫

炎天の下で青桐の葉が黝くろんで見えるほど暑あつきのきびしい或る夏の単調な午後、格子の内と外の板廊下にいる者が見えないところでこんな話をしている。

「どうしたんだか、まだ写真を送ってよこさないんだがね」

「江の島で撮ったんですか」

「ああ、子供ら五人ズラツとハア並べちゃってね。わしと女房と撮ったが——どうしたもんだか……」

「いくらでした？」

「三枚で一円さ」

「——普通は二週間は待ってやらなくちやね。所書分っているん

でしよう？」

「ああ、ちゃんと受取の帳面があんでしょ？ あれに書いていたつたがね」

「受取を持ってりや大丈夫ですよ」

「それがよウ、どうしたことか家さ帰って、なんぼ見ても、どこさ放ろつたもんか見当らないから困つてよ」

「そりや困つた。まさか騙だますつてこともないだろうが」

「ふーむ」

声のなかに響いている東北なまりの訛が私に、広くて黒びかりのしていた台所の涼しい板の間を思い浮かべさせた。

小学校が夏休みになると、子供らの中で私一人が田舎のおばあさんのところへ出かけた。東北に向って行く汽車は、その時分黒くて小さかった。私は袴をはいて窓際に腰かける。汽車は一つ一つの駅にガツタンととまり、三分、又五分と停車しながら次第に東京を離れて東北の山野の中へ入って行くのであったが、私にとつてこの八時間の旅は、暑いのと、開けた車窓から石炭がらが目に入るのと、弁当を買わなければならないという亢奮事のため、独特の印象をもっていた。構内の空地に生木の匂いの高い木材が柵の遠くの方まで積み重ねられ、そこへカツと斜陽が照りつけ、松林では蝉が鳴きしきっているような午後の人気ない停車場などで、汽車は長い間とまった。そして、蒸気の音ばかりさせる。

私は居眠りをした。暑くてたまらなくなると、窓から氷を買ってハンケチに包み、それをハンケチの上から吸った。そのハンケチも、汗と煤とで、郡山へ着くまでには真黒であつた。

一カ月ほどおばあさんのところで暮すと、私の言葉には田舎の尻上りな調子が、すっかりうつた。東京へかえるときには、きまつて枝豆と玉蜀黍とうもろこしを入れた重い縞の風呂敷包みを持たされた。その風呂敷包みを蹴込みに入れ、私をのせた俵が桑畑の間の草道をまわつて埃っぽい街道の上へ現れる。すると、私はいくら首を振つてももうこれ以上後は向かれないところへ行くまで、右手の小高い丘に向つて、朝日を受けている俵の上から手を振つた。その高みの楓の生垣の上には遠くおばあさんの立姿がいつ迄も動か

ず見えていた。おばあさんの小さい姿が見定められないところへ来て、街道の俵の上からはまだ夏座敷の縁側と丸く刈り込んだ檜葉の庭木が見えた。こっちからその眺望がきく間は、おばあさんの方からもまだ私の乗っている俵は見えているわけなのであった。

田舎の生活は一日が永かった。その中でのおばあさんのひとり暮らしも単調なものであったが、私にとっては刻々が都会にはない色彩と音響とに充たされたものであった。私は鶏や犬や子供や大人にくつついて、村の中をどこでも歩き廻った。

或る日夏草のむせかえるようななかに臥ねていた。むこうの耕地の緩い斜面に葡萄畑が見えている。遠くで雷が鳴っている。

やがて葡萄棚で葡萄の葉がサツと白く葉裏をひるがえしてざわめき立ったと思うと、灼けた耕地の面を湿っぽく重い風がうねり渡つて、あつちの地平線から夕立がやって来るのが見えた。

私はびつくりして草の中から立ち上り、驟雨の先ぶれで一層埃の匂いのきつくなつた草道の間を一心に家に向つて歩く。家から遠く来ていることがこの時になつて始めて感じられるのであつた。雷がいきなり近くへ来て鳴つた。低く、威圧するように尾を引っぱつて山々が^{こたま}が訝する。私はもう駆け出しているのだが、両脚はサツサツ、サツサツと桑の葉に幅ひろい音を立てて迫つて来て、最初の雨の一粒が汗一杯の頬つぺたを打つてころがり、道の埃をまゐるめたと思うと四辺は水煙り、私はずぶ濡れだ。足の甲に草っぱ

の千切れたのをはりつけ、雨がまばらに光って降っている中を家へ辿りつくのであつた。おばあさんは叱る。けれどもそれは別にこわくない。

もう何日かで東京へ帰るといふ時、私の頭に虱がついているのがわかつたことがあつた。縁側に私を坐らせ、後に立つて髪をこまかにわけては虱をかりながら、おばあさんは私までもひき入れられる程に思い入つた調子で、

「虱なんぞたけて帰したら、ハアお前のおつかさんに何ほ怒らつちやか！」

と呟いた。そして、

「もういねえか？」

となお私の頭を手でまわして髪の間をしらべるのであった。

大体田舎での私の生活は東京へ帰ってから余り話題にならなかつた。田舎が与える新鮮で鋭い印象は全く感覚的なものであつたから、それをどうとまとめて話すということも難しかった。それにその頃の親たちの毎日の暮しは、おばあさんや子供の生活と或るところでは接触し、しかし或るところでは全く離れてもいた。女の児の精神と肉体との中に無言の作用を営む田舎の感覚は、私たちの生活の感情からはどつちかと云えば離れた方の部分に属していたと思われる。

私が十七になつたとき、弟たちは十五と十三で、だんだんその

弟たちも、夏はおばあさんのところで暮すようになった。

連山を見晴す風通しのいい茶の間で三人の孫がチャブ台をとりまき、盛りあげた飯の上に枝豆を青々と弾きかけ、おいしそうに食べている。おばあさんの御飯はどうにすんでいる。糊のこわい白緋の膝の上へ肱をつき、長煙管でゆっくりとあやめをふかしながらおばあさんは孫たちの食べる様子を眺めていたが、ふつと、

「お前ら、帰るまでには一遍どこさか連れてって呉れずばなんめえなあ」

と云った。孫たちは、

「つれてって！」

「連れてって！」

「あした連れてって！」

と湧き立った。儉約なおばあさんにしては全く珍しい。

「どこさいぐ？」

そう云われると子供らは急にどこへというような場所をかねがね知っているというわけでもないのであった。

「浄土松さでも行つて見るか？」

「岩のある山でしよう？ 詰らないわ」

私は、

「猪苗代湖へつれてってよ、ね」

と云った。

「それも涼しくついていいか知んねえなあ……」

私は弟たちも湖というものはまだ見たことないのを知っているのであった。

私共がお八つにゆでた玉蜀黍を食べている間に、おばあさんは黒い紗の袂を暑さに透かせ小さい蝙蝠傘の黒い影を赤土の上にくつきり落しながら、猪苗代湖行き相談にどこへか出かけて行った。

程なく手にカンナの花の剪つたのをもって帰って来た。

「本当に、おばあさん、あした行くんでしょ？」

「そうよ、しか」

夜になって茶の間に風呂貫いの人々が集ると、おばあさんは炉辺でぐるりと皆に茶を注いで出しながら、

「あしたは孫どもをひとつ猪苗代湖さでもつれてつて呉れべえと思つてなし」

などと、どこか改つた言葉つきで云つた。私共は傍に並んで坐つて、そんな応答を聴いている。それは、何だかふだんとはちがう夜に感じられるのであつた。

翌る朝目が醒めると、もう家じゆうが開け放されていて、おばあさんが一人で茶の間にいる。生憎曇つて、茶の間からいつも見える山がその朝は見えなかつた。それでも、弟たちがステーションへ先発した。おばあさんと私とは俵で、後から家を出かけた。

ステーションの在る町は村から小一里離れていた。田圃の中にポツツリ一軒唐傘屋があつて、そこから次第に餅屋、蚕種試験所

と町並が始るのであったが、恰度^{ちようど}二台の俵がつづいて左手に高い石崖のある小学校の角を停車場通りに向つて曲つた時であつた。グリーンと妙に濁つたベルの音が一つ響いたと思うと、二間ばかり先を駈けていたおばあさんの俵が、幌へ風でも孕んだような工合にスーと後へ顛覆した。極めてゆるやかに、極めて軽やかに梶棒を上にしてひっくり返つた。私をのせた若い車夫は惶^{あわ}てて体を反らせ、惰力を制して止つた。いそいで降りて、ひっくり返つた俵の横へ行くと自転車が一台ラムネ屋の屋体の下に横倒しに放^ほり出されて、夏羽織姿のおばあさんは俵夫と衝突したどこかの小僧とに扶けられてもう地面に立っていた。何とも云わず、あたりまえに蝙蝠傘を突いてそこに立っているが、片方の手をあげ

て抑えている額は蟬のように血の気を失っている。まわりに人だかりもない。この瞬間、異常な出来事が信じられないように夏の午前の空気は透明なままに澄んでいる。

私はおばあさんを支えて、そろそろと前の牛肉屋の店頭まで行って、その店先をかりて腰をおろさせた。俵夫を薬屋へやって、葡萄酒をとって来させた。その牛肉屋の店先には茂った葡萄棚がある。おばあさんの滑らかな小さい額は一層蒼ざめて見えるし、その下で口元へさし出す葡萄酒の赤い色はコップの中に重く沈んでなお濃く見えるのであった。

暫く休んでから、改めて近くの医者のところへそろそろと歩いて行った。玄関で私が書生に訳を話していると、すだれ簾の奥から浴衣

姿の年とつた奥さんが、

「まあおばん様、あぶなかつたのし」

と国言葉で云いながら出て来て、祖母を扶けて座敷へ上げて呉れた。

そうこうしているうちに汽車に乗るはずの時刻は夙とつに過ぎた。

紺姿の弟たちはステーションでさぞ待ちかねて不安でもいるのだろう。私は、

「おばあさん、きょうはおやめにしましょう、ね。国ちゃん達を呼んで来て頂きましょうよ」

と云うが、おばあさんは低い声ながら、

「折角出かけたからには行って見べし」

と、程なく自分から立つて帯などをしめるのであった。

上戸じょうごという駅で私たちは汽車を降りた。朝から曇っていたところ汽車を降りたら雨が細かく降り出している。二間ばかりの掘割があつて、往来の左右に柳が茂っている。バスケットなど下げて湖の畔まで歩いて行くうちに、雨は本降りのようになつた。湖畔にひとを泊める家は一軒しかないらしかつた。ほんとうの田舎宿で、上り端の埃だらけな板敷の隅に南かぼちや瓜がどつきり並べてあつた。キシキシと暗い段梯子をのぼつて天井の低い二階へあがると、すぐその部屋に黄色い髪をした女の西洋人が若い日本の女と乱雑な荷物の間で何かしていた。水の入ったブリキの大きい盥のようなものが煤けた畳の真中に出ている。狭い廊下の通りすが

りに私共の目にちらりと入ったその光景は、場所が南瓜のころが
つたりしている穢いところだけに、何だか異様な感じがした。

その隣りの部屋に私たちは泊ることになった。さて、窓に肱を
かけて、私共は雨の中をおばあさんと一緒に辿りついた猪苗代湖
の面を凝つと眺めわたすのであったが、水の色も空の色も同じに
濡れた薄灰色で、遙か対岸の山まで煙っている景色は、湖面が広
々としているだけに、とらえどころなく思われた。雨脚は目に見
えているのに、湖に近いそこは砂地なせいかあたりに雨だれの音
さえしないのも、気分を沈ませた。私は早熟な感情で、田舎宿の
様子や隣室の西洋人の女の暮しぶり、雨の湖の風景などを眺め味
わおうとするのであったが、弟たちは窓に二人並んで物も云わず、

簡単に降りこめられた姿である。

暗くなつてよつぽどしてから、五分芯の台ランプが下から運ばれて来た。夕飯の膳には南瓜と、真黒で頭の大きい干魚の煮たのとがついた。なかなかむしれず、箸でたたくといかにも堅い音がする。ほら、こんな音がする、と私共がかわり番こにその黒い干物の煮つけをたたいてみると、おばあさんが、自分のお膳にもついている同じ魚を皿ぐるみ手元にとつてとう見こう見していたが、やがて、

「なんだべ……鯨でねえかしふア」

と云つたので、私や弟たちは宿について初めて、ランプの灯の揺れるほど笑いこけた。

夜があけてみると、同じ曇りながらも夜のうちに雨があがつて翁島の方も見晴らせ、涼しい朝風が吹いている。私と弟たちとは、雨のために表面だけ薄くかたまつたような湖畔の砂の上を歩いて行つた。時々ふりかえつて手を振つた。宿の二階の窓から、おばあさんが顔を出してこつちを眺めているのであつた。

その辺は、湖のまわりに農家がまばらに在るきりで、樹のふつさりとした茂みの下に小舟が引上げられているのを見つけ近づいて見ると、底が朽ちていて、胴の間を抜いて砂地からの雑草が生えている。湖のそばだというばかりのさびれた在所なのであつた。

私共は何か湖へ来たらしい面白さの種をさがすような気持で、

その辺を所在なくぶらついた揚句、湖へ掘割の水が流れ入る堰の上へ出て行つて見た。そこからは湖心へ向つて五六間の細長い石畳みの堤が突き出ている。

私はぶらぶらとその突ばなのところまで行つてみた。そして湖に向つて腰をおろし、足をひろげるようにして下を覗くと、底まで蒼々と透きとおつた水の中に三四寸の小魚が群をなして泳いでいるのがはつきり見えた。底の方を泳いでいる魚や石ころは黝ずんで見えて、その辺の水の深さと冷たさとが感じられる。

「ほら、ほら、何かつかまえたわ！ 見える？ 右の方へ行つちやつた！」

「随分小さいのもいるね」

私と上の弟とは並んで腰かけ、砂へ左右の手をついて上体を折りまげ水をのぞきこんで眺め興じたが、気がついて見ると次の弟だけ一人離れて、その突堤のずっと手前のところ立ってこつちを見ている。我々のいるところからは三間たつぷり離れていて、汀に近く、そんなところに立っていたのではとても水の底の小魚は見えないのであつた。私は振向いて、

「道ちゃんおいで」と手招きした。

「魚がいるよ」

「ウン」

間をおいて思い出してはふりかえって、二度も誘うのに動かな

いので、

「何故来ないのさ、おかしなひと！」

私は思わずむっとした声を出した。この弟はよく私に対してこういう態度のことがあった。私はいやな気持で黙ってしまった。

「道ちゃんおいでよ」

穏やかな口調でやがて上の弟も誘った。それでもなお同じところから一步も近づかず、次の弟は暫くして独言のように呟いた。

「姉きょうだい弟だつて仲のいいのは小さい時だけで、大きくなれば何を
するかわからない」

私はむっとしたさつき気分のつづきで湖面へ顔を向けたままであつた。が、だんだん弟の云つたことがその場所と自分たちの

姿勢とに結びついて理解されると、腰かけたままの自分の体がスーと宙に浮いて行くような恐怖を感じた。一緒に並んで腰をかけないのは、そんな用心からであつたのか。十三の弟一人だけがそういう心持を持っている。そのことは恐ろしかった。やつと辛棒して私は二三分元のままの姿勢でいたが、到頭我慢しきれなくなつて、湖に向つてぶら下げていた脚をそろり、そろりと片方ずつ引上げた。

「——帰ろうか」

上の弟も私に声をかけられるのを待っていたように直ぐ立ち上つた。私たちのこわくなつた心持を知られるのも一層こわいように、砂地で待っていた次の弟と黙つて一緒になり、私共は出たと

きどおりの三人組で宿へ戻った。

午後になるとまた雨が降り出した。私共は雨中の山峡に汽車の白い煙が窓を掠める間を引上げて、湖から帰った。

おばあさんの家へ帰ってからも、それから後も、次の弟は二度とあんなことを口に出さなかつた。私と上の弟とは余りぞつとしたので、却つて互にそれを口に出して話すことが出来なかつた。

姉弟三人で草っ原にころがつて綺麗な夏の夕焼空などを眺めたりしている時、不図あの言葉を思い起すと、私は自分の力では拭い消すことの出来ない黒い斑点が自分たちの生活にしみつけられたことを感じた。そしてその黒い一点はいつ見ても同じところにある。時には云つた本人の弟は忘れていて私だけがハッキリそれを

思い出していることを感じることもある。そういう時私は恐怖と嫌悪の混りあつた激しい感情で喉元をしめつけられるのであつた。

次の弟は六つばかりの時、母の実家へ相続人として養子にゆき、姉弟の中で育てられながら一人だけ姓が違つていた。私や上の弟とは違つて、彼だけは通知簿を母方のおばあさんに見せなければならなかつたし、その度に、七十近くなつて息子を廃嫡しているおばあさんは頼ろうとする孫にくどくどと云い、母もついそれにつれて、勉強おしとか、お前はほかの人とはちがうんだからとか、次の弟に責任を自覚させようとするのであつた。

この弟だけが姉弟たちのことを、母へ告げ口をした。

私が十九の年、この弟は腸チブスから脳膜炎にかかつて亡くな

った。十五歳であつた。田舎のおばあさんは歎いて、

「いたましいことをしたなあ。お前のおつかさんはあの舎弟息子を呉れてやって、ちつともめんごがらなかつたでねえか」

と云つたが、それは違つた。母は次の弟を決して愛していないのではなかつた。ただ、幾人もの姉弟の中で、たった一人自分だけ姓がちがい、自分だけに絶えず注目され、彼としては意味ののみこめない責任を感じさせられて育っている余り俊敏でない少年の感情の鬱屈が、母には分らなかつたのであつた。死ぬ前日、急に意識がはつきりしたとき、この弟は母に、

「僕、ほんとうにお母様の子なの」

と訊いた。母が涙を落しながら、そうだともし、どうしてそんな

ことを訊くのと云うと、

「そんならよかった。うれしい」

と溜息をついた。そのことを、後から話して母は激しく泣いた。そして、

「道ちゃんを中村家の後つぎにするという話があったときだって、私は気がすすまないでね、何度もおことわりしたんだけど、恰度おばあさまがいらしてその話の最中に、どういう工合だったのか真白い鳩が飛び込んで来て神棚へとまっで行ったんでね、到頭私も道ちゃんをやる決心をしたんだけれど……可哀そうに」とかこつた。

一カ月ばかりしてから、私はこの弟が殆んど敵意を示して誰に

もさわらせず、自分の中学生らしい勉強机の傍に置いていた小棚を、非常に複雑な好奇心と恐怖とをもって、そつとあけて見た。中からは、桃谷にきびとり美顔水の藍色の空瓶ばかりが、ごろごろと出て来た。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五卷」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第五卷」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「中央公論」

1935（昭和10）年10月「中央公論」五十周年記念特大号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

2003年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

突堤

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>